

	<p>エッセイ</p> <h1>私の受けた小学生教育</h1> <p>SCE・Net 牛山 啓</p>	<p>E -57</p> <p>発行日 2013.10.26</p>
---	---	--

もう3年ほど前になるが、小学校時代恩師の3回忌墓参りのため、その前日信州の上田に近い新戸倉温泉で同級会をした。

先生を偲んで夜遅くまで皆で思い出にふけり、良く立たされたり怒られたり、時にはひっぱたかれたりした話を懐かしく語り合った。その際、小学生当時授業ではほとんど発言することもなかったS君が、「俺も良く怒られたが、小学校を卒業する頃ある時、先生に『このままでは先が心配だから、夜7時から来れる時には先生の家に来い』と言って下さり、ほとんど毎日教えて頂いた。おまけに中学を出る時は、就職先を駆けずりまわって探して下さり、今あるのは本当に先生のおかげだ」としんみり話し、これには皆驚いた。彼のその話は誰も知らなかった上、何よりも彼が自分から話をしたのを聞くのは初めてだったからだ。今ではその会社の専務をしているとのことで、成長した彼の姿が眩しかった。

それからひとしきりまた先生にいろいろ教わった話が続いたのち、今の教育はおかしい、政治が悪いと侃侃諤々やりだした。小学校時代には、現在のいわゆる落ちこぼれだった彼も含め話す光景は、高校や大学の同期会と全く同じもので感慨深かった。そこには成長した社会人の姿があって、この恩師のクラスの仲間は皆、充実した人生を送ってきたことが伺えた。

この先生の教育カリキュラムは非常にユニークで、現在であれば、教育委員会にはまず許されなかったかもしれない。音楽を除けばすべて先生自らの手作りカリキュラムで、それを自分で教えていた。6年間通して一人で教育するというのが、その小学校に来た時の条件だったそうだ。そのため、当初から6年間の構想をもって教育していたのであろう。教科書はほとんど使用せず、国語や算数はすべて毎回手作りのプリントで授業した。

我々の授業がスタートした頃は戦後間もなくの昭和23年で、田舎とはいえ食べるものも着るものも満足になく、日本がどのように変わっていくかも定かではなかった。生徒の心を学校生活の中で勉学に集中させるのも難しい中で、「どんぐり」という一つのアイデンティティを作った。これが、子供たちの心の支えになり、苦しくても負けない、皆で頑張ろう、間違ったことをしたら「どんぐり君」が見ているぞと常に自分を律する力になっていった。6年の卒業文集にその名がついているのでも、そのことが分かる。

先生は、授業のある日は毎日B4の半紙にその日に使用する教材をガリ版で刷ってきて、授業が終わるとその教材を集め、夕方のホームルームまでの間に、その裏全面に小さくても分かりやすい字で書いた家庭通信を刷って配っていた。毎週金曜日には1週間まとめの

試験があり、月曜日には個々の解答の裏に試験問題の意図や、まとめ、成績分布図などを記載し、これを家庭通信としていた。このため、親は毎日の通信で学校の状況やわが子の状況が良く分かっていた。

この通信は最初、どんぐり通信と呼ばれていたが、ある時から PPT 通信と呼ばれるようになった。これは、とあるこの級の PTA の会合の席で、PTA では主役になるべき子供たちがいないところで先生と親が話すことになりおかしいと、先生が発言され、PTA を PPT (Parents, Pupils and Teachers) と呼ぶことにしたようである。この会はその後 PPT 通信がその連絡手段となり、子供たちもそれを見ることによって、親や先生が何を考えているか分かった。

日頃の教育では、先生は非常に厳しい真摯な顔を見せ、宿題をしてこなかったり、教材を持ってこなかったりすると、授業を真面目に受ける意思がないとみて、教室の後ろに立たせたり、時にはびんたや拳骨をふるい、半泣きで教室の外に立たされることもあった。だが、これに対して、普段の教育姿勢から先生が悪いのではなく、自分たちに非があることは皆分っていたので、いくら怒られても次の授業にはケロッと先生になつき、先生も生徒もそれを引きずることはなかった。皆、たとえ半人前の生徒であろうが、先生はその人格を認めてくれているのを、子供ながらに分かっていたからである。

教育のカリキュラムで思い出すのは、4年生頃から毎年以下のような、数か月から半年くらいかけて継続的に研究するテーマがあったことである。

- ・稲の一生 (4年) : 田舎の学校ではどこでも稲作の勉強はやるが、ただ育てるのは少し異なっていた。学校の一角にあぜを作り、丁度 1.5 アールほどの田圃を作った。苗代に種の植え付けから始め、その苗を皆で田植えしたが、その際、田圃の場所ごとに 1 株の稲の本数を 2~5 本に分けた。水温や天候の記録のほか生育状況を観察し、田の草取りなども皆で手分けをして行った。稲の花が咲くのを観察すると風のあまりない天気の良い日に午前中 30 分ほど咲くだけで、午後には咲かない。この頃の天候が非常に重要なことも理解できた。秋には収穫を行い、最初に植えた一株の本数で収穫量に差が出ることを知った。最も収穫量が多いのは 3 本ないし 4 本で、5 本にしたものは途中で養分の不足が出て、一株あたりの収穫量が落ちることが分かった。ただ、一番良い状態での実際の反収を推定してみると、当時のベテラン農家の 7~8 割しかなく、実際の農家がいかに努力しているかも分かった。
- ・ストーブの研究 (4年冬) : 冬は教室の真ん中に薪ストーブがあったが、それでも北側にいる生徒は寒かった。ストーブの形式を調べたり、教室内の温度を測定して、皆がおなじような状況になるにはどの場所にストーブを置いたら良いか調べた。その結果北から 1/3、南から 2/3 の位置にずらしたら良いということになり、早速工事をしてもらい、いままで寒くて震えていた状況が解消できた。今思えば、まさに化学工学の授業を受けたことになる。

- ・かいこの生育（5年）：生物の完全変態の勉強として取り上げた題材で、あらかじめ毛蚕を近くの農業試験場からもらってきて、6名程度のグループで毎日変化する状況を観察した。脱皮の時は各人が何匹かずつ家に持ち帰り、夜中にその観察をしたり、繭ができる、一部は蛾が出てくる状況を観察し、残りは茹でて、それから生糸を皆で引いた。一方、蛾はすぐオスとメスが交尾し、まもなくメスは600～800くらい卵を産む。通常はそのまま冬眠し半年くらいかかって毛蚕ができるが、農業試験場の方から、2%フォルマリン液と43℃の塩酸液につけ孵化出来ることを聞き、その方法で少ないながら10匹ほどの毛蚕を得て、文字通り蚕の一生が完結した。現在ではどの学校でもこの観察はやっているようで、実際私の娘も東京で小学生の時、家で蚕の観察をしていたが、全員が一緒にやるのではなくどこまでやるか個人に任されていたようだ。娘は生糸まで作っていたが、一般には、最後の生糸にしたり、毛蚕を作るところまでやっていることはないようだ。
- ・豪華客船ミニチュア製作（6年）：浮力や波力の理科学習の一環であったのだろうが、皆で当時世界1位か2位の豪華客船クイーンメリー号の100分の1模型を作ることになった。これは当時そのようなプラモデルがあったわけではなく、木製ではあるが、船体はすべて手作りで作るようになった。ただ、我々生徒だけで作成できたわけではなく、皆の両親の多大な協力も頂くことになった。

偶々、木工所を経営していた方がいて、材料の手配から設計図作成、材料切断などをお世話になり、生徒は分担して組み立て、バフ研磨仕上げや塗装を行った。この模型には木炭によるスチームエンジンが搭載され、実際に水上を走れるようになっており、近くの池でその進水式を行った際には、地方放送局から取材され報道された。

この救命ボートには我々生徒と両親の言葉を入れ、卒業後毎年同級会で2隻ずつ二組の親子の言葉が開かれ、その行事は20年継続された。その言葉は後日卒業文集「どんぐり」にも追加して掲載された。



(進水式後の記念写真)

このような教育は現在多くの学校でも取り入れているようであるが、大事なことは、皆が必ず自分のできることを分担して全体を完成させることであろうが、その点が現在の教育では抜けている気がする。というより、先生はその意図があっても、生徒がまとまらないのであろうか。

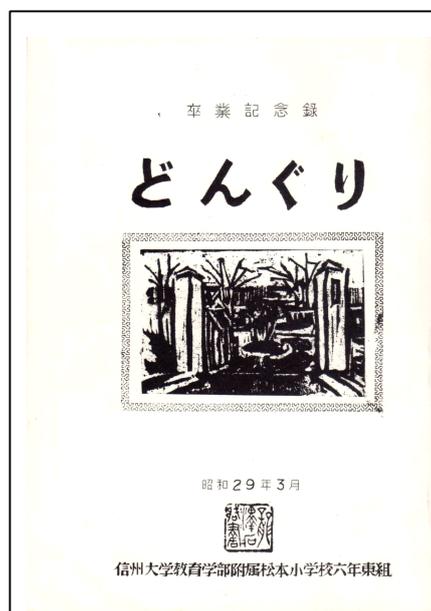
他にも面白い授業があった。1時間継続して1から数字を書いていくのであるが、持久

力と仕事の速さを問うたものであろう。1時間も数字を書くと手先が震え我が手ではないように感じてくる。ここで最も数字をかけたのは、小柄でも運動神経のあった男の子で、普通の成績はそれほど良くななくても意外な能力があることが皆にも分かった。それを皆に教える意図も先生にはあったのかもしれない。1時間位数字がどのくらい書けるか分かるだろうか。6年生の時、その子は3800字くらい書いてダントツであった。

宿題も一日で終わるようなものは少なく、必ず長期間努力するようなものが出された。私の選んだ宿題は12月頃から7月くらいの間、太陽が東の山から上る位置を調べるものであった。日の出の時刻に寒い冬の朝起きるのはつらい作業であったが、冬至の頃一番南側から上がる太陽が次第に北側から顔を見せるようになり、時刻も次第に早くなっていく。夏至の頃には逆に南側へ戻り始めるようになる。丁度冬至や夏至で方向を転じるわけではなく、日の出の時刻もピークになるわけではなくずれることが分かった。単純なことでも、ものをじっくり観察し、辛抱する必要があることも教わった。

彫塑の授業があった。ウサギの像を石膏で作るのであるが、我々が最初に粘土で作る場合、表面が凸凹になって見栄えが悪い。しかし先生はそのまま良いとってそのまま石膏にした。石膏像が出来上がってみると、不思議に凸凹が返って生きて、勢いよく動き出すような、生きていそうな像に見える。他の級で作ったものは表面がきれいに仕上げられ、一件美しいが、何故か死んでいるように見えた。たとえウサギの彫塑でも真の姿が見えるには、形を作るだけではだめだと教えられた。

このような授業が現在のような時代に良いかどうかは分からない。だが、当時、皆学校が楽しくて仕方がなかった。これは紛れもない事実であり、小学校の授業にはこれは大事なことであろう。現在ではこんなことをしていたら、入試に差し支えるという親もいるだろう。しかし小学校教育は、点数を出して、子供たちの人生を決めるところであらうか。もう少し、人間としての可能性を引出し、将来の希望を膨らませるところであり、さらに言えば、人間として生きるための基礎を叩き込むところでないかと思う。その面から、今、このような教育をすところがあっても良いのではないかと思う。



(卒業文集「どんぐり」中は各自筆のガリ版刷り、観察記録や船模型製作費まで記載されている)

(おわり)